

## 第4章 2024年度「学術知デジタルライブラリの構築(X-DiPLAS)」プロジェクト報告

澁谷由紀・小川有子

### 1. はじめに：「学術知デジタルライブラリの構築 (X-DiPLAS)」プロジェクトについて

バックコック研究チームはこれまで、同時代または異世代の共同研究者の間でどのように研究データを共有し継承するべきかという問題や、研究者と調査地がどのように研究データを共有すべきかという問題について検討を重ねてきた。

本年度バックコック研究チームは、「ベトナム紅河デルタ農村の社会変容－1990年代以降の伝統と革新の重層化」という課題名で、人間文化研究機構共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」国立民族学博物館拠点 (X-DiPLAS) 公募プロジェクトに採択された。これにより、写真資料のデジタル方式による複製、サーバー上に設置されたデータベースへの登録、あらかじめ定められた公開条件に基づく複製物のインターネット等のネットワークを介しての公開について支援を受け、研究情報の集積と共有化の基盤整備ができることになった。本章はこの「学術知デジタルライブラリの構築 (X-DiPLAS)」プロジェクトの研究の進展を報告するものである。

### 2. プロジェクトの重要性と意義について

このプロジェクト参画に用いられたのは、ベトナム紅河デルタのバックコック村 (ナムディン省ヴァン県ティンロイ社) にてベトナム村落研究会を中心に 1993 年から実施されてきた長期の継続的村落調査で撮影された写真群である。そのなかでも、調査最初期の 1995-2000 年までに撮影された、村民の日常生活や家屋・祭祀関連施設・道路・上下水道・電線等の構造物、農地や屋敷地の生物相・農業技術・農業用水路等を含む村の景観写真を対象とした。当該写真コレクションの重要性としては、(1) 当時のベトナムではカメラを持つ村民はほぼ皆無であったこと。(2) 村の変容が継続的にビジュアルな記録として残されることは稀であったこと、(3) 村の景観が経済発展の以前と以後で急速に変容するさまを明確に捉えていること、が挙げられる。そのため、「圧縮された近代」が生じた東南アジア農村社会の変容を理解する上で学術的に重要であるばかりでなく、ソースコミュニティ、ひいてはベトナム社会全体にとって残すべき価値のある重要な資料であるといえる。

より詳しく述べれば、紅河デルタの農村社会では、戦争や社会主義化、経済発展の過程で、家屋建築や祭祀 (儀礼行為や関連建造物を含む)、農耕技術等、多くの伝統が失われたように見えるが、さまざまな契機で復興し、むしろ、伝統と革新が重層化して村落の景観に埋め込まれている。写し込まれた景観や日常生活の様子から多量な情報を読み取ることができ

る点と、村民の記憶を喚起することでよりアクティブに聞き取り調査を進めることができる点から、写真資料はこの重層性の読み解きに決定的に重要である。また、「学術知デジタルライブラリの構築」への参画により、国内外の研究者や村民と共有することは、これまでの研究成果の検証や他の地域との間の比較の可能性を高めるという点でも、個人情報への意識が強まるなか村民の調査に対する理解・協力・参画を得て今後の調査継続性を高めるという点でも意義があると考えられる。

### 3. 写真資料について

#### 3.1. 資料の構成

写真資料は下記の (1) (2) から構成される。

##### (1) 野口博史氏撮影ポジフィルム 169 シート、合計およそ 6,200 枚

1995 年撮影 66 シート

1996 年撮影 46 シート

1998 年撮影 22 シート

1999 年撮影 15 シート

2000 年撮影 24 シート

※1 シートは最大 37 枚 (フィルム 1 本分)

※スリーブに入っている (マウント化されていない)

※1997 年撮影写真は野口氏不参加のため存在しない

##### (2) 小川撮影ネガフィルム

1998-2000 年撮影 200 枚 (2025 年 3 月 1 日時点で未送付)



小川撮影のネガフィルム

#### 3.2. 資料の選択

写真資料の選択は小川が行った。申請時に上記 (1) (2) の合計として、「ガラス乾板 (0 点)・ネガ (200 コマ)・ポジ (4,800 点)・デジタルカメラ等で撮影されたデジタル画像 (0

点)・その他(0点)」とカウントしていたが、実際に整理をはじめてみると、上記の写真の中には、同じアングルで複数コマ撮影されたもの、調査団員自体の写真、バックコック以外が撮影されたものなどが含まれていた。X-DiPLAS 公募プロジェクトの上限枚数が5,000枚程度であったこともあり、撮影年や撮影者の限定や複数コマ撮影された写真の除去などにより枚数の削減を図ったが、ネガ上では判断が難しい、同じアングルの写真をデータベースに掲載することは差し支えない等の石山俊氏(X-DiPLAS)の序言により、撮影年や撮影者の限定をせず、合計およそ6,500枚を選択した。

### 3.3. 著作権

写真撮影はベトナム村落研究会が組織した調査団が実施したものであるため、あらかじめ野口氏・小川の詳細を得たうえで、ベトナム村落研究会および調査団の一員である野口氏・小川が著作権をベトナム村落研究会に譲渡したもの(著作権者はベトナム村落研究会)として、当初プロジェクトに公募した。しかしながら、任意団体の著作権は権利処理が困難であることから、実際の撮影者である野口氏・小川をそれぞれの著作権者とした。

## 4. 2024年度の研究進展状況

### 4.1. 採択者ワークショップ

2024年8月1日(13:00-15:30)、オンライン形式でX-DiPLAS採択者ワークショップが実施された。バックコックチームの出席者は澁谷・小川で、国立民族学博物館からは、X-DiPLAS代表の飯田卓氏(グローバル現象研究部・教授)、システム担当の丸川雄三氏(人類基礎理論研究部・教授)、プロジェクト室の石山俊氏(グローバル現象研究部・プロジェクト研究員)、小林直明氏(グローバル現象研究部・プロジェクト研究員)ほか、X-DiPLAS事務補佐員や管理部研究協力課共同利用係の諸氏が参加した。

打ち合わせ内容は、他課題のデータベースの紹介、3.3.に前述した著作権の問題、今後の日程等。

### 4.2. 写真整理

前述3.2.の通り。後述する第1回ミーティングの後、小川が2024年12月末までに国立民族学博物館に写真現物を送付した。

### 4.3. 第1回ミーティング

2025年10月13日(10:30-11:30)、澁谷・小川が石山氏とオンラインでミーティングを行った。内容は下記の通り。

- ① 写真枚数の調整(前述3.2.):1998-2000年の小川撮影分も含めることにした。
- ② 写真公開の手続き:データベースは、第一段階ではクローズド(非公開)で設定し、公開に問題がないと判断した写真から公開に変更していく。「片倉もとこ「アラブ社会」

コレクション」を例に、人物写真の公開に関する配慮事項や、許諾承諾書の形式について X-DiPLAS から情報提供を受けた。

- ③ 写真の活用方法：調査地でのストリート展示や写真集の公開等の可能性を検討した。
- ④ 写真のナンバリング（固有番号の付与）：年代順に並べるのが基本であり、「年号→（アルバムの塊番号—01\_01（シート番号の何枚名）\_）」という方法を採用することにした。

#### 4.4. 第2回ミーティング

2025年1月30日（10:30-14:45）、小川・澁谷が国立民族学博物館を訪問し、送付した写真のデジタル化と公開に必要な作業について石山氏と対面で検討を行った。とくにデジタル化作業チーム事務補佐員の近藤氏・中島氏には、撮影機材の説明をいただくとともに、サムネイルとエクセルフォームの作成について具体的に様式を定めた。また丸川氏と対面で面談した。内容は下記の通り。



打ち合わせ風景

- ① 日程調整：3月末頃まで、X-DiPLAS のデジタル化作業チームがサムネイルと整理用のエクセルフォーム作成までの作業を行い、6月中くらいに写真の撮影（デジタル化）を完了する予定。その後、システム担当側でデータベース化作業に入るが、これまでのケースでは1-4年程度を要している。
- ② 番号シールの貼付：見間違いのミスを防ぐ目的で、独自に付与した番号のシールをスリーブもしくはフィルムに貼付する作業を行う場合もある。番号シールを貼るか否かの判断は、X-DiPLAS 作業チームに任せる。現状ではフィルムにコマ番号があり、同定は可能であること、シールを貼付すると撮影時にフィルムを送る際にひっかかるというデメリットがあるので、検討の上判断すること。スリーブの中のフィルムは、左寄せにする。ただし、シートに記載されている撮影者野口氏がプリント枚数を記すために付した数字は、その写真への着目度を表している場合もあるため、エクセルシートに反

映し記録として残す。

- ③ X-DiPLAS で紹介を受けたエクセルフォームとタグ付与の例、およびプリントアウトされたシート写真（の現物またはデジタル版）をもとに、バックロック研究チームで分類やタグ（1つに複数付すことが可能）の候補を決める作業を行う。試験的に 100-200 枚にタグを付与し、タグ（分類）の大枠を作成する（2025 年 3 月中を想定）。
- ④ 写真の撮影が終わった段階で、肖像権等の観点から慎重な確認が必要な人物と家屋の写真を除く風景写真を取り出し、キャプションやタグをエクセルフォームに入れる作業を行う。分類（エクセルフォームやタグ）は下記の通りとする予定。
  - キャプションとは写真のタイトルとなる内容で、検索時に写真の下に表示される。（例えば「石の廟」など）
  - タグ：タグとタグの間は半角スペースなしの「,」で区切る。
  - 説明欄：字数制限はない。同じキャプションが異なる写真についてもよい。
  - 年月日：年のみでよい、詳細が不明な場合は、「1980 年か」など。
  - 「撮影対象物」：タグ=キーワード、これを検索することで一定のスクリーニングを経た写真を集めることができる
  - インターフェースはできれば日本語と英語の 2 種類とする（英語のインターフェースは他のプロジェクトですでに運用されている）。
  - 表記は多言語対応（現地語対応）を重視して日本語・英語・ベトナム語の三言語表記とし、その作業を優先する。三言語を独立させて表記するのが難しい場合は、英語とベトナム語を続けて表記する（palm tree/cây dừa といった形で、英語とベトナム語を一緒に同じエクセルの列に入力するなど）。
  - 大分類は国会図書館 Web NDL Authorities から英語・ベトナム語を拾えば適訳を考える手間が不要という案もあったが、統制語を使用しないほうが個々のコレクションの特徴を打ち出せるという意見も出された。
  - 公開不可の写真の場合は、不可と判断した理由を付しておくで将来公開する際に作業が容易である。
  - データフォーマットをエクセルで仕上げる。地名はナムディン省までとするか、それ以下について記述するか要検討。現在のところ、データベース内部にまでは Google 検索はかからない。データは CSV で吸い上げ、翻訳を入力してから戻すことも可能
  - 公開時に「プロジェクトの詳細はこちら」といったコレクション自体の説明文を付けることが可能。
  - 人物については撮影地域によって公開の可否が大きく異なってくるが、個人が特定できる場合は書面で合意を得ることが基本原則。人物写真のデジタル化公開は大きなインパクトになるが、問題が発生しない範囲で慎重に進めるべきである。
  - まずは個人を特定できる可能性のある人 (a) と家屋 (b) の写真、個人を特定でき

る可能性のない風景 (c) の写真で仕分けし、公開可否を検討する必要がない (c) だけ先に公開できるよう作業を進める (公開可能性の高い写真を先に洗い出す)。ベトナムの文化的特徴を考慮し、その際に、よく見なければ人とわからないものは人に分類しなくてもよいとする。(c) のうち田畑については解説文を付す等自由に設計可能。

- 食べ物などのタグは AI タグで済ませることも可能。
- 肖像権等の保護には慎重を期すべきだが、データベース化する 90 年代の写真の時代から現在までの間の景観変化が大きいため、古い写真から撮影地を特定するのは困難なケースが多い。
- キーワードは 150-200 設定したとコレクションもあるが、30 くらいを目安に大まかに行う。事前作業で大体の分類方法が固まったら、バックログ研究チームで分担して作業を進めることができるようになる。他のデータベースとの間でタグを共有することは当面考えない。
- データベース公開時には、ベトナムの研究機関や省庁などと連携する可能性も検討する (公開度合いを来館者のみに設定するなどの方法がある)。

⑤ エクセルフォームの主な項目は以下の通り。

No	: 通し番号
タイトル (管理名)	: 番号 (ここでは年・スリーブ番号・フィルム番号で構成)
撮影者	: 野口博史・小川有子
撮影時期	: 1995-2000 年 (年のみでも良い)
撮影地域	: ナムディン省ヴーヴァン県
民族名	: キン族
地域民族分類 (OWC)	: Human Relations Area Files (HRAF) の分類
文化項目分類 (OCM)	: Human Relations Area Files (HRAF) の分類
撮影対象物	: =タグ、キーワード
キャプション	: 一覧画面で写真の下に表示される
関連情報	:
説明	:
公開可否	:
公開条件	:
管理情報 1-	: 番号、フィルム (ポジ・ネガ・スライド)、カラー・白黒、
利用許諾	:
権利情報	:
ステータス・地域 ID・年代 ID・調査 ID	